



オルガ・フロンティア プロジェクト・オルフェウス

【えっちな宇宙SF短編集♡】

誰も疑問を持たない

その狂気のシステムは、

今や日常を支えるインフラとなった

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア・宇宙インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

あの星の海で 君を人と呼ぶために



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メ宇宙インフラモノ
「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

《ワタシハ マダ ニンゲンデスカ》

砂嵐（ノイズ）の奥から、亡霊のような文字列が浮かび上がった。

「マザー。現宙域で、外部からの救難信号を受信することはあり得るか？」

AIがその存在を冷徹に否定する静寂の海で、俺だけがその光を見た。

兵器として消費され、氷の棺に閉じ込められた少女。

彼女が最期に求めたのは「救助」ではなく、自身が人間であることの「証明」だった。

あの星の海で君を人と呼ぶために

《キタイタイハ キュウエンモトム》

その十五文字が戦術モニターの隅に淡く浮かび上がったとき、俺は悪い冗談だと思った。

それまで何も映っていなかったモニターが突然点灯し、砂嵐のようなノイズを発し始め、そしてこれだ。

この宙域——通称「アイアン・セメタリー」に存在するという、たちの悪い噂。「電子の亡霊」か。

過去の大戦で散った兵士の思念が、大干渉のノイズに乗って彷徨っている——そんな、古戦場では歴史적으로よくある戦場伝説の一つだ。

だが、文字は消えない。

俺は思考を切り替えるべく、乾いた喉に冷めた合成コーヒーを流し込み、独り言のように呟いた。

「マザー。現宙域で、外部からの救難信号を受信することはあり得るか？」

『ありません』

即答だった。艦を統御する統合AIの合成音声は、氷のように冷たく、事実だけを告げる。

『現在位置はアイアン・セメタリー深度B。本艦はステルス航行中。友軍コードでのみ受信は可能ですが、現宙域に本艦以外の作戦中の艦艇は存在しません。極秘作戦行動中の……』

「いや、もう良い」

俺はマザーの説明を中断し、モニターのウィンドウを閉じようとした。

そう、閉じようとした——その指が、止まった。

《キタイタイハ キュウエンモトム》

ノイズの砂嵐の奥で、その文字列が、再び表示された。

「機体大破、救援を求む」

単純に考えれば、何らかのトラブルに遭った機体からの救援要請だ。だが、そんなものはこの静寂の海に存在するはずがなかったのだ。



聖暦2058年。

人類が星の海へ旅立ってから四半世紀。

そこに持ち込まれたのは、フロンティア・スピリットなどという高潔なものではなく、地球時代から続く生存競争と、より洗練された殺し合いの技術だけだった。

核の使えないこの世界で、唯一の高出力エネルギー源となったのは、女性の最も強い生存本能から溢れ出す生命エネルギー——性的絶頂（オルガズム）である。

俺たちが乗るこの機動輸送船MT-0043号の心臓部も、巨大な「オルガリアクター」だ。

壁一枚隔てた向こう側では、数十人の女たちが機械に繋がれ、強制的に快楽を搾り取られ続けている。

その熱が、この鉄の棺桶を前へと進めているのだ。

不快な振動がコンソールを伝って指先に届く。

それは女たちの声にならない喘ぎが、金属を震わせているようにも感じられた。

そして、戦闘兵器も同様だった。

人型の量産型オルガマシン、UNI-101「ハウンド」。

地球時代の末期、資源枯渇に喘ぐ国家が禁忌を破って開発したこの機体は、AI制御による圧倒的な量産性で、連合を覇権国家へと押し上げた主力兵器だ。

宇宙戦争の時代に突入した現代においても、改良が続けられ、半世紀以上にわたって使い続けられている負の遺産。

そのエネルギー源もまた、生身の女だ。

機体の神経系に直接接続された彼女たちの絶頂が、スラスターを吹かせ、レーザーを撃たせる。

かつてこの宙域にも大量に投入され、そして鉄の屑となって打ち捨てられた。

「亡霊だと」

『識別番号0087通信士レオン。顔色が優れないようですが』

AIに顔色はわからない。

俺の心拍数や発汗、バイタルデータを読み取っての冷徹な診断だ。

「問題ない。不思議な痕跡を見つけた。確認したい」

俺はマザーの警告を無視し、光学センサーのログを解析しようとした。

『ログに受信記録なし。妄言は反乱の兆候とみなされます』

マザーの警告が冷ややかに響く。

普段であれば背筋の凍るような言葉だ。だが、今の俺は別の事実を意識を奪われていた。

「.....まさか、共鳴しているのか？」

これはデータではない。

「光」だ。

レーザー通信ですらない。

デブリの影から漏れ出る、蛍火のような淡い燐光。

それが不規則に瞬き、俺の視神経と、この旧式コンソールの古い回路にだけ干渉して「言葉」を結んでいる。

戦場の怪談にある「オルガ・レゾナンス」。

行き場を失った強い生存本能が、物理的な光となって観測者を魅入る現象。

俺は震える指先で、光学カメラのジョイスティックに触れた。

座標などない。理屈もわからない。

ただ、胸の奥を搔きむしるような、何かに呼ばれている感覚に従って、指を動かした。

感じるままに、上下、左右。そして、深度。

レンズが暗黒の虚空を彷徨い、ある一点でピタリと止まった。

「いた」

デブリの中に浮かぶ、不自然な人工物の残骸。

元々は人型だったオルガマシンの半分が吹き飛んでいる。

我が連合が誇るハウンドの成れの果てだ。

酷い有様だった。

量産性を重視したハウンドの装甲は薄い。

マイクロミサイルか榴弾か、右半分がごっそりと抉れていた。

複合材が激しく損傷し、フレームが歪んでいる。

だが神の奇跡か、あるいは悪魔のいたずらか。

胸部のコックピットブロックだけは、奇跡的に原型をとどめていた。

そして破碎された装甲の隙間を埋めるように、機体から漏れ出した冷却用生体ジェルが分厚く凍結し、白濁した氷の結晶となって内部を密閉しているのだ。

それはまるで、永遠の氷の中に閉じ込められた、儚いガラス細工のようだった。

俺は唾を飲み込み、光学ズームの倍率を上げた。

彼女は、そこにいた。

氷の結晶に閉じ込められたその裸身は、戦場には似つかわしくないほど滑らかで、月光で磨き上げられた大理石の彫像のようだった。



陶器のように白い肌、緩やかな曲線を描く腰つき。

だが、その肢体は無骨な機械に強固に拘束されていた。

柔らかな胸には電極ピアスが容赦なく食い込み、無防備に晒された華奢な脚の間からは、工業用の太いチューブが無慈悲に深く突き刺さっている。

その冒涔的な光景でさえ、彼女の凍てついた聖性を際立たせているように見えた。

死んでいる。

生物が生きていられる状態ではない。

しかし、その凍りついた身体から、あの温かくも物悲しい燐光が立ち上っている。

〈お前は誰だ〉

反応があるとは思えなかった。

それでも俺は思わず、指向性レーザー通信でメッセージを送っていた。

《ワタシハ マダ ニンゲンデスカ》

明確な返事があった。意思があった。信じられない。

だがそれよりも、彼女の問いが、俺の思考を奪った。

連合の法に照らせば、否だ。

彼女はUNI-101の制御生体部品。

消耗品リストの行番号にすぎない。

物理的にも、否だ。

彼女の身体は、ただ兵器を動かすためだけのエネルギーユニットだ。

今の彼女は、氷漬けにされた有機デバイスに過ぎない。

だが、その問いを発した「心」は？

ハウンドに搭載される女は、徹底的に自我を破壊され、思考能力も失っているはずだ。

それなのに。

それなのに数年もの間、絶対零度の孤独に耐え、自分が何者かも忘れながらも、誰かに届くことを祈り続けたその光は、一体何なのだ。

「.....人間だ」

俺は誰に聞かせるでもなく断言した。

再びコンソールを無意識に操作した。

『再警告。作戦行動中のレーザー通信は、本艦の位置暴露につながります』

一度目は気付かなかった、マザーの重度の警告。

軍事行動中の重大な規律違反だ。

「うるさい、黙ってろ！」

それでも、俺は止まらなかった。

これだけは伝えなければならない。

合理性だけの世界で生きていた俺の胸に、かつてない熱が籠もった。

氷漬けの彼女とは対照的な、焼けるような熱だ。

〈そうだ。君は人間だ〉

機械は、自分の存在を疑ったりしない。

部品は、自分が部品であることを嘆いたりしない。

その苦しみこそが、痛みこそが、君が人間である最後の、そして絶対的な証明だ。

誰かと言葉をかわし、繋がりを欲する。

それが人間でなければ、何だというのだ。

俺の打った通信レーザーが、デブリの闇を切り裂き、彼女を封じる氷の棺を貫いた。

モニターの向こう。

氷漬けの少女の瞳が、ふわりと揺らいだように見えた。

彼女の身体から立ち上っていたあの幽霊のような燐光が、一瞬だけ強く、温かい色に輝いたように見えた。

まるで、最期の瞬間に燃え上がった命の灯火のように。

そして、最後の十五文字が、消え入るように浮かび上がった。

《アリガトウ コレデ ネムレマス》

ハウンドの残骸から感じていた光が消えた。

自分の中にあった熱が何だったのか、その時ようやく気づいた。

システムによって興奮状態にされ続けた女たちの、行き場のない熱。

その欠片が、俺の心に宿っていたのかもしれない。

ふっと、自然とモニターが消えた。

彼女は旅立った。

数年間の孤独な任務を終え、ようやく深い眠りに着いたのだ。

◇

『進路上にデブリを検知。障害物の回避行動を開始します』

マザーが、何事もなかったかのように航路を調整する。

船がゆっくりと旋回し、鉄の棺桶はスラスターの噴射炎に煽られ、デブリの彼方へと遠ざかっていった。

「マザー。俺の刑罰は」

『識別番号0087通信士レオンは特に違反を犯していない』

マザーの回答に、背筋が凍った。

「先程の無断でのレーザー通信の使用は」

『そのようなログは存在しません。対象なし。通信の必要性が論理的に認められません』

ドクンと心臓がはねた。

俺はモニターを再び起動し、必死にログを調べた。

だが、そこには何もなかった。

救難信号の受信記録も、光学カメラが捉えたハウンドの姿も、俺が送ったメッセージも。

光学ズームで見たはずの場所には、今やありふれたデブリの影があるだけだ。

マザーは嘘をつかない。

だとすれば、記録されていないのではない。

彼女が眠りについた瞬間に、この世界が「彼女」という存在そのものを、静かに押し流してしまったとでもいうのか。

ただの夢だったのか、それを確かめる術は、すでにない。

だが、俺の心の中には、確実に彼女を感じた確信がある。

冷たいコンソールを握りしめている指先に、あの燐光に触れたときのような微かな温もりが、まだ残っている気がした。

マザー。

記録には残らなくていい。

この歪な宇宙の片隅で、一人の人間が最期まで抗い、そして美しく眠りについたことを。

世界がどれほど白々しくそれを「なかったこと」にしようとも、俺だけは、あの光の色を覚えている。

俺は暗転したモニターに映る、少しだけ穏やかな顔をした自分の影を見つめ続けた。

その瞳の奥には、今もまだ、彼女が遺した最後の一熱が灯っていた。

<完>

作品名:あの星の海で君を人と呼ぶために

発行日:2026年4月25日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
